

# アドラー心理学から読む『宙ぶらりんの男』：思考の袋小路からの転換を求めて

著者	朴 育美
雑誌名	研究論集
巻	108
ページ	21-33
発行年	2018-09
URL	<a href="http://doi.org/10.18956/00007816">http://doi.org/10.18956/00007816</a>

## アドラー心理学から読む『宙ぶらりんの男』

— 思考の袋小路からの転換を求めて —

朴 育 美

### 要 旨

ソール・ペローの『宙ぶらりんの男』には、精神分析的思索に自己救済の糸口を求める、主人公ジョウゼフの内面世界が赤裸々に描かれている。その姿は、現代の私たちが「本当の自分」を求め、ただならぬ関心を心理学に寄せる姿にも重なる。昨今の心理学ブームの背景にあるのは、日常生活に支障をきたすほどではなくても、「自由になった」心と自己をもてあます人の増加だろう。この論考では、精神分析的思索の限界を顕在化させ、それを打ち破る手法として、トラウマを否定するアドラー心理学に注目する。具体的には、フロイトの原因論を批判し、より実践的な人間救済を目指したアドラーの個人心理学を軸に、改めて主人公ジョウゼフの内的葛藤について考え、思考の袋小路からの転換を模索する。それはきっと、自己への関心に取りつかれながらも、自己をもてあます現代の私たちに、何がしかの生きる手がかりを与えてくれるのではないだろうか。

キーワード：アドラー心理学、原因論と目的論、精神分析的思索

### 1. はじめに

小説『宙ぶらりんの男』の時代背景は、第二次世界大戦のさなかだ。主人公のジョウゼフは、陸軍の徴兵に応じるための入隊通知を待っている。しかし通知は7か月たってもまだ届かない。仕事もやめ、妻に養ってもらう生活を不甲斐なく思いながらも、ただひたすら連絡を待つという「宙ぶらりん」の状態の中、本格的に新しいことを始めるわけにもいかず、学生時代に没頭していた学問への関心も途切れ、悶々と時間を過ごしている。やがて社会的所属から切り離された7か月の間に、すっかり異常な心理状態に支配され始めたジョウゼフは、心の中に立ち現れる苛立ちやいかり、焦燥や嫉妬、孤独や不安を客観的に整理しようと日記を書き始めた。それがこの作品のテキストである。

70年以上の歳月を経て、今なおこの作品が古典として読み継がれているのは、主人公のジョウゼフの心をかき乱す不安や焦燥感が、現代の私たちにも、リアリティを持って迫ってくるからだろう<sup>1)</sup>。時代や場所を問わず、人間は他者からの承認を求めずにはいられないし、「自分

とは何か」「生きるとはどういうことか」といった実存的問題から逃れるわけにもいかない。むしろ「自由に人生を選ぶ」ことが奨励され、「自分に合ったものを見つけ、自分らしく生きること」が期待される現代の社会では、多くの人が、実存的な問いに、うまく着地点を見つけられないまま、ジョウゼフと同じような行き場のない苛立ちや焦燥感に、苛まれているのではないだろうか。

私たちは通常、自分の中に湧き起こる苛立ちや焦燥感を、内省によって取り除こうと試みる。しかしそれはなかなか思ったようにはうまくいかない。多くの場合、自己の中へと解決策を求めることは、かえって外の世界への不信を増長させ、自分の周りに築いた壁を強化することに終わってしまう。内省の軌跡は、円の弧のような跡を残し、私たちを思ったほど遠くに連れていくことはできないのだ。ジョウゼフも、自己との対話を通じて、なんとか心の平安を取り戻そうとするが、かえってその過剰な内省の時間に翻弄される。そして、久しぶりに出かけた外の世界で、自分の意志とは裏腹に、自身が持っている理想とはかけ離れた言動をし、人を傷つけ、周りの人との疎外感をつのらせ、結局、より一層自分の殻にこもってしまう。

人間は、時間に余裕のない生活を送っている時は、あらゆる義務から解き放たれた、自由な時間を持つことを熱望する。しかし、いったんあらゆる社会的拘束から解き放たれ、自由な時間を手に入れると、自分の精神と向き合わざるを得ない膨大な時間に圧倒される。人間が「何も考えない」という空白の時間を持つことが許されていない以上、一見贅沢に見える“自由な時間”は、終わりなき思索の時間となっておそいかかってくる。豊かな時代が生み出す、過剰な思索の時間は、私たちを自分が何者であるか、生きるとはどういうことなのかという根源的な問いへと向かわせる。

現在の日本でも、引きこもりや抑うつ、依存症など、心の問題が大きな社会問題になっている。哲学書が売れ、心理学書がベストセラーである昨今の心理学ブームの背景にあるのは、日常生活に支障をきたすほどではなくても、物質的に豊かになった社会で、「自由になった」心と自己をもてあます人の増加だろう。劣等感と自尊心の間に折り合いをつけられず、精神分析的思索<sup>2)</sup>に自己救済の糸口を求める主人公の姿は、いきづまった現代の私たちが、ただならぬ関心を心理学に寄せる姿にも重なる。

主人公のジョウゼフは、精神分析的知見を含む、自らの知性を総動員し、自己分析による自己救済を目指す。過去の出来事にどれだけ意味づけを試みても、思考の袋小路から解放されることはできない。むしろ過度の自己省察によって、ますます袋小路に追い込まれてしまう。過去を掘り下げ、無意識に隠されたトラウマを探し求める精神分析的省察は、つかの間の慰めをもたらすかもしれないが、過剰な言葉の世界に、再び自己が絡めとられる罠がある。斎藤(2009)<sup>3)</sup>は、現代の日本社会における心理学ブームを支えているものが、安易なトラウマ探しである点を指摘しているが、トラウマの物語はカタルシスをもたらしてくれる一方で、被害

者意識にお墨付きを与え、それを肥大化させる危険性をはらむ。忘れてはならないのは、被害者意識がせり出した場所で、どれだけ内省を繰り返しても、自己救済の糸口はつかめないということだ。

この小説が書かれた当時のアメリカも、トラウマに焦点を当てたフロイトの精神分析や、ポストフロイト派が世を席卷し、社会科学の学問領域に、広く影響を与えた時期である<sup>4)</sup>。精神分析からの影響は、作者であるソール・ペローの作品全体に通底するものであり、この作品でも、主人公のジョウゼフが繰り返す魂との対話や、夢の描写、分裂する自己との対話など、その端々に見ることができる<sup>5)</sup>。ただ、ペローは、精神分析に深い関心を持ちながらも、フロイトが、無意識をトラウマやリビドーのような概念から体系化し、あらかじめ答えが用意されているような決定論的分析をすることに、強い反発を感じていた (Brans 142-43)。ペローがフロイトの精神分析に深く影響を受けながらも、批判的だったことは、ジョウゼフが精神分析的思索を繰り返しながらも、その思索の袋小路から、抜け出すことができない結末にも反映されている。

同様に、フロイトの共同研究者であったアドラーも、フロイトの決定論やトラウマ理論に異を唱え、より実践的な、人間救済の心理学を探究するため、フロイトと決別し、独自の心理学を打ち立てた。無意識からトラウマを探し当てるやり方は、原因と結果を固定化し、決定論的アプローチは、クライアントの自己決定や自己救済の機会を奪ってしまうと考えたのだ。媒体方法は違うが、ペローは文学を通じて、アドラーは新しい理論を構築することによって、ともにフロイトの精神分析を経由しつつも、フロイトの決定論を批判的に乗り越えていこうとした方向性において、親和性を見ることができるのではないだろうか。

この論考では、ペローとアドラーのそのような問題意識を結びつけることを試みる。具体的には、フロイトの原因論を批判し、より実践的な人間救済を目指したアドラーの個人心理学を軸に、焦点を原因論から目的論へと転換させ、改めて主人公ジョウゼフの、内的葛藤について考え、その行き詰まりからの脱出を試みる。そのような発想の転換は、自己への関心に取りつかれながらも、自己をもてあます現代の私たちに、何がしかの生きる手がかりを与えてくれるのではないだろうか。

## 2. 理論的枠組み：アドラーの個人心理学

フロイト (2009) は、人間の心を意識と無意識に分割し、人間は、自分に不都合な感情、または受け入れがたい経験を、無意識の中に閉じ込め抑圧すると考えた。そして、意識と無意識の間にある葛藤が、心の病とよばれる症状をもたらしていると理論づけた。意識と無意識の葛藤のように、人間を部分に分け、部分が全体に及ぼす影響を考えていったフロイトに対して、

アドラーの個人心理学は、個人をこれ以上分解できない全体としてとらえ、人間の反応や言動は、全体としての個人の目的のために行われると考える。つまり個人の内面の葛藤に注目するのではなく、全体としての個人の意図が、何に向かっているのかという目的<sup>6)</sup>に注目した。

例えば引きこもりという症状について考えてみる。ひきこもりになった原因を、会社を解雇されたから、恋人に裏切られたからといった特定の出来事と結び付けることは、簡単で、一見説得力があるようにも見える。しかし、会社を解雇され、恋人にふられても、引きこもりにならない人もいるし、また反対に、そのような外的要因がなくても、ひきこもりになる人もたくさんいる。

そこでフロイトの精神分析では、無意識という概念を用いて、症状の原因は、目に見える外的な要因にあるのではなく、無意識の中に隠されていると考えた。クライアントの幼いころからの生い立ちや、初期の人間関係（特に母親との関係）を明らかにすることで、無意識を顕在化し、問題の原因に近づこうとした。フロイトの精神分析は、対話を通じて、クライアント自身が主体となって、無意識に押し込められ、認識することを拒んでいた感情を見つけ出し、それを言語化することを治療の柱とした。

精神分析の対話によって、クライアント自身が、幼いころの母親との関係を振り返り、過干渉の母親の機嫌を損ねないように、いつも依存的な役割を果たしてきたことや、自立することで母親との関係が損なわれてしまう、または母親に見捨てられてしまうという恐怖が、無意識に抑圧されていることを見つけ出す。また、幼いころの母親との依存関係が、大人になってからのあらゆる人間関係のひな形となり、誰に対しても、依存することで関係を維持していこうとするのだ、といったことに気づかせる。このような無意識の言語化によって、症状が取り除かれると考えたのだ。

一方、アドラーの個人心理学では、ひきこもりの原因を、過去にさかのぼって考える代わりに、個人が、今、ある目的を持って引き起こしている、または選んでいる状態だとする。過去の記憶は、現在の目的を達成するための手段だと捉える目的論では、症状は何かの結果なのではなく、そこには必ず、目的が隠されていると考える。例えば、引きこもりのケースでは、幼いころいじめられたことがトラウマになって、外に出て行って、また人に傷つけられるのが怖くて引きこもるといふようには考えない。

そうではなく、家族から心配し、注目してもらいたい、あるいは自分が引きこもっていることで、いがみ合っていた両親を仲良くさせたいといった隠された目的が、外に行くのが怖いという感情を作り出し、引きこもりになっていると分析する。アドラーの理論では、いかりや悲しみといった感情は、何か原因があって湧き起こってくるものではなく、人間が目的のために作り出すものであり、それは「誰か」に向けられたメッセージである。それゆえ心の問題は、過去の人間関係の結果ではなく、今ある人間関係の問題であると考えなのだ。

概観したように、フロイトの理論もアドラーの理論も、表面的には意識できていないものを顕在化させていこうとする点においては、共通するところも多い。しかし、過去に遡るフロイトが原因論なのに対して、あらゆる症状は、その人の目的追及の手段としてあらわれると考えるアドラーの理論は、未来に焦点を当てた目的論といえる。二つの理論は、責任の所在<sup>7)</sup>と方向性という点で大きく違うのだ。次のセクションでは、アドラーの目的論的視点から、ジョウゼフのいかりや苛立ちについて考察し、その出口を模索してみたい。

### 3. テキスト分析

ジョウゼフの日記は、1942年12月15日に始まり、翌年の4月9日で終わる。この間、ジョウゼフは、しばしばめ事を起こしている。内省によって、客観的に怒りと向き合い、哲学的思索や内的対話で、自分の異常な精神状態を克服しようとするが、結局は同じようないさかいを繰り返している。ジョウゼフの日記では、怒りが湧き起こってきた状況や原因に焦点が当てられているが、感情は目的達成のため創り出されだされる、というアドラーの視点に立つならば、連続する怒りの原因ではなく、目的を認識することが重要になる。

#### 3.1.

まず、12月22日の日記に書かれた騒動について考えてみる。

この日、ジョウゼフは、友人に会うために出かけたレストランで、偶然昔の仲間に出くわし、もう少しで大げんかになるような騒ぎを引き起こす。この知人とは、昔、共産党系の団体に属して一緒に社会運動をしていた仲間であるが、ジョウゼフが脱党して以来会っていない。今日の待ち合わせのレストランは、まさに当時ミーティングを重ね、熱く語り合っていたその場所だ。やめたことを後悔するわけではないだろうが、自分がとっくにやめてしまった団体に、まだ情熱を持って活動をしている知人を見て、内心どう思っただろうか。かつては同志と認め合う仲だった人間との関係は、決別したからと言って簡単に解消するものではない。

店に入るや、その知人を見つけたのも、たとえ付き合いはなくなっても、相手にどう思われているかが、潜在的に関心事であり続けることを物語っている。松任谷由美の歌<sup>8)</sup>の歌詞に、別れた恋人との偶然の再会に備え「どこへ行くにも着飾ってたのに、どうしてなの、今日にかぎって、安いサンダルを履いてた」というものがあるが、人は、決別した相手との、あるかもしれない再会に無意識に備えているものであり、その時優位に立ちたいという気持ちから解放されるのは容易ではない。

特に、今は仕事もなく、不安定なジョウゼフにとって、精神性の優越は、自尊心を守る唯一の砦だ。だからこそ、精神的な部分でつながっていた古い知人からの反応は、重要だったはず

である。お店で鉢合わせした瞬間から、古い知人との人間関係がどう更新されるかは、ジョウゼフにとっては、非常な関心事だった。しかし知人は平然とジョウゼフを無視した。そしてジョウゼフは激高する。

ジョウゼフの激しい怒りの感情は、表面的には、ライバルともいえる昔の仲間が自分を無視したことに対して湧き起こったものであり、ジョウゼフ自身もそのように解釈している。しかし、アドラーの理論では、怒りは、何か原因があって、その結果生じるものとは考えない。怒りは目的のために作り出されるものであり、「無視された」から怒ったのではなく、怒るために「無視されたこと」を利用していると考えなのだ。問題にされるのは怒りの目的だ。

もちろん一般的に言って、無視されれば、腹がたつし、「無視されたこと」と「激高」の間には、直接的な因果関係があるように見えるかもしれない。しかし、私たちは、無視されるたびに、いつも大声をあげて「怒り」を演出するわけではない。「無視された」ことと、怒りのパフォーマンスの間に、必然性はないのだ。目的論では、感情は、人間のコントロールを超えたところで湧き起こってくる制御不能な症状なのではなく、自分の目的に応じて持ち出すことができる道具や手段だと考える。

表面的な原因に惑わされることなく、目的から考えれば、ジョウゼフの怒りは、自分の優位性を示し、自尊心を守るために作り出されたと考えるのが妥当だろう。「無視されたこと」はその言い訳に過ぎない。原因論と目的論の本質的な違いは、責任の所在だ。原因論の枠組みでは、「無視されたから」というように、責任を外部に転嫁できるが、目的論の枠組みは、責任を外部に転嫁することを許さない。そのような視点こそが、フロイト理論とアドラー理論の分岐点でもある。

また、ジョウゼフが派手に怒ることで、優越性を示したかった相手は、自分を無視した知人だけではなかつただろう。仕事を紹介してくれるといった友人も含まれていたはずだ。なぜ自分の味方であるはずの友人にも怒りを提示する必要があるのか。それは、私たちの大半がそうであるように、ジョウゼフもまた、上下関係から人間関係をとらえる習性から自由ではないからだ。

私たちは、上下関係と対等な関係を分け、友人とは横の関係、目上の人や上司などに対しては縦の関係といったように、二つの関係を別々に使い分けられていると思っている。しかしアドラーは、人間は、横か縦か、一つの人間関係しか持てないと指摘する。つまり、人間関係を横で捉える人が、相手が誰でも、比較や競争の対象として見ないのに対して、人間関係を縦で捉える人は、全ての人間関係を比較の軸で捉え、他者を潜在的な競争相手として敵視してしまうという。そのように人間関係をとらえる時、怒りの感情は、自分の優位性を示すための格好の道具となり、必要に応じて呼び出されることになる。

人間関係を縦の関係で捉えるジョウゼフにとって、友人もまた、上下関係の網の目に絡まれ

た一人であり、弱い立場から甘えることは自尊心を傷つけられることなのだ。手を差し伸べてくれる友人から、自尊心を守るためにも、怒りは必要だった。騒動の後、ジョウゼフは、友人に「仕事の件はもう忘れてくれ」と伝え、仕事の話をしなかったことにすることで、友人の「精神的負担」を取り除いてやったと総括している。しかし実際は、仕事の話がなくなったことで「精神的負担」を逃れたのは彼自身なのではないか。騒動のために、仕事の話がなくなったのではなく、仕事の話をしなかったことにしたいから、騒動を起こしたのだ。

また、ジョウゼフは騒ぎの後、自分の怒りは、自分を無視した知人に対してというよりは「運動をねじまげて僕を脱退させた人々」(35)に向けられていた、と分析しているが、自らの優位性を示すための怒りのパフォーマンスは、知人や友人や昔の仲間だけでなく、レストランに居合わせた人、そこに居合わせなくても、潜在的に自分を軽く見るあらゆるオーディエンスにも向けられているといえるだろう。同伴した友人は「人が見ているから」と止めるが、「人が見ているから」こそ怒るのであり、目的が達成されるのだ。

### 3.2.

次に12月26日の日記に書かれた騒動について考える。

レストランでの騒ぎのわずか三日後、ジョウゼフは、兄の家に夕食に招かれた折、姪の不敬な態度に激高し、暴力をふるう。表面的には、生意気で尊大な12歳の姪の態度に腹をたて、姪のためにも教育なくてはならないという「救済」の気持ちから暴力をふるったと振り返っている。しかし、この出来事も人間関係に焦点を当てて考察すると、隠された目的が見えてくる。

幼いころから、あらゆる面でジョウゼフより優れていた12歳年長の兄は、仕事面でも家庭面でも、社会的にいう、いわゆる成功者である。経済的な豊かさが、幸福に密接に結びつくと考える兄は、お金にならない学問に時間を費やし、結局一流の会社にも就職せず、ぱっとしない家柄の女性と結婚し、出世などには関心がないジョウゼフの生き方が、齒がゆくて仕方ない。一方ジョウゼフは、時に辛辣であっても、彼の生活を絶えず気にかける父権的存在の兄に対して、最低限の礼儀は尽くすようにしている。しかし、わずかな金額であっても、兄からお金をもらうことを、かたくなに拒む彼の態度からも、兄に対する強い反発と対抗心がうかがえる。

自らを「思索的人間」(24)であり、「学者」(25)であるとするジョウゼフは、自分は兄とは違った価値観を持ち、もっと崇高な人生を歩もうとしていると自負しているのだろう。しかし、彼が、自主的に選んでいると思っている人生における選択が、まさに、兄を「がっかりさせる」ということに動機づけられているという点において、彼は兄の支配から自由だとはいえない。そしてこのような兄との関係が、姪に対する暴力の下敷きになっているのだ。

裕福な家の娘として育てられた姪は、兄譲りの資本主義的価値観を体現しており、お金がないジョウゼフのことを乞食呼ばわりして軽蔑している。姪にとって、フランス語の家庭教師も



してくれたことのあるジョウゼフは、少なくともインテリで、尊敬の対象であってもおかしくない。しかし、彼女は、知性があっても富をもたない叔父には、無礼な態度をとっても許されると思っている。

ジョウゼフと姪の対立関係は、知性と富の権力闘争と見ることもできる。ジョウゼフの姪に対する優越性を支えるのは知性であり、姪の叔父に対する優越性を支えるのは富である。ジョウゼフは、兄の前では、卑屈なポジションを甘んじて受け入れなければならない分、姪に対しては力づくでも、人間の優越性が、富ではなく知性にこそ帰属するということを、認めさせたいと思っているのではないか。しかし、本当に自分自身や自分の信じている価値観に自信があれば、幼い姪の態度に、同じレベルから腹を立てて反応することはないだろう。自分はお金に執着がないということを強調しながらも、姪からお金がない事を指摘されると激昂してしまうのは、世俗的な富を軽蔑しながらも、彼が決してそのような価値観から自由でないことを顕在化する。

アドラーは、すべての人間は劣等感を持っており、その劣等感をばねに優越性を追求することが、人間の成長において欠かせないと考える。しかし、人はしばしば劣等感を肥大化させ、屈折したやり方でしかそれに対応できなくなってしまう。その状態をアドラーは、劣等コンプレックスと呼ぶが、劣等感が、劣等コンプレックスになってしまうと、人は劣っていることそのものを課題とすることを回避し、何か他のことで、自分の優越性を誇示することでごまかそうとする。

ジョウゼフは、姪の不敬な態度に怒り、その矯正の意味を込めて暴力をふるったつもりであるが、「救済」という名の暴力で、自らの劣等コンプレックスを解消しようとしているのだ。彼が本当に打ちのめしたかったのは、自分を軽んじる人間関係の全てであり、彼の怒りと暴力の目的は、自分が、兄や兄の家族が象徴している世俗的な価値観より優れていること、自分がそのような価値観にひれ伏すような存在ではないことを、兄の家族のみならず、そこに居合わせた自分の妻にも知らしめることだ。縦の人間関係に支配されるジョウゼフにとっては、兄弟も妻も潜在的な敵であり、信頼を欠いた人間関係は、優越性をめぐる終わりなき闘いなのだ。

### 3.3.

最後に、翌年3月26日の日記に書かれた騒動について考えてみる。

前日、妻がジョウゼフに、自分が仕事に行っている昼間の間に、銀行に行って小切手を換金しておいて欲しいと頼む。ジョウゼフにとって、銀行は敷居が高い場所だ。というのも、換金の際に行われる本人確認のプロセスは、無職のジョウゼフにとっては煩わしく、プライドを傷つけられるようなものだからだ。先日も、そのことで行員に対して声を荒げちょっとした騒ぎを起こしたばかりである。しかし、そのあたりの詳しい事情までは、妻に話したくない。

ジョウゼフは、騒ぎを起こしたことには触れず、身分証明で断られたことがあるのを理由に、行くのは嫌だという。しかし、妻の方も、それでは引き下がらない。最近では追剥が出るようだし、仕事帰りの遅い時間に大金を持ち帰るのは怖いからとくいさがり、押し問答は、言い争いへとエスカレートする。

ジョウゼフは、「なぜ、急に追剥を恐れる必要がある？ 思いつきの口実だろう。長い間、それよりもっと沢山の金を持って帰ったじゃないか。それが突然こわくなる。ほくに使い走りさせたいのが本音だろう？」(192)「きみは、自分が毎朝勤めに行くのに、ほくが家にいるのが癪なんだ、無意識のうちに。きみは生活費を稼いでいる。だからほくにいろいろな用事を考えだすんだ。本当は自分の食い扶持を稼げといたいんだろう」(192)といて妻を責める。

妻は泣き出し、ジョウゼフはさらに声を荒げる。争われているのはもはや、どちらが換金にいくか、そのこと自体ではない。互いが相手に対して優位に立とうとする権力闘争だ。妻は泣くことで、ジョウゼフは怒鳴ることで、目的を果たそうとしている。そもそもジョウゼフが妻に対してずっと不機嫌でいるのは、妻に気を使わせ、妻の心を不安にさせることで、彼女に対して優越性を維持したいという目的があるといえる。「今の自由をたっぷり楽しんで、軍隊に入ったらとでもできそうにない面白いことを沢山やって、せいぜい本を読んで頂戴(8)」という妻の期待に応えず、本も読まず論評も書かない引け目を、不機嫌で武装しているのだ。人間は、自分がやるべきことを回避している時、不機嫌を装い自己防衛する。

妻との喧嘩の勢いは収まらず、怒りは次のターゲットに飛び火する。今度の相手は、普段から、わざとらしい咳払いと、トイレの使い方のことで気に入らない隣室の老人だ。ジョウゼフに「咳は酒と神経のせいであることはたしか」(13)で、「人の注意を惹こうとして咳をすることは、こちらにはちゃんとわかっている」(13)と分析される老人は、「思索の人間」を自負するジョウゼフが、真剣に怒りをぶつけるような相手ではないはずだ。もめ事は、下宿の人々を巻き込んだ夜中の騒動に発展し、ジョウゼフは、最後には宿主の娘婿と激しい口論をはじめ、ついには下宿を追い出されことになる。

実は、ジョウゼフが下宿を追い出されるのはここ1年余りで2回目である。2月5日の日記に、懐古的に書かれているが、去年の冬、ここに引っ越してきたのは、前の家主と殴り合いのけんかをしたことがきっかけだった。「現在のほくの不機嫌は、最初去年の冬にあらわれた」(150)で始まるこの日の日記には、前の家主夫妻との関係が良くなったり、悪くなったりしながら、やがて不満が蓄積していった経過が詳細に書かれている。ジョウゼフは「喧嘩の理由は、長い間に出来上がったものだった。」(150)と認識している。

しかし、下宿の家主と喧嘩をすることが、退去のリスクをはらんでいることは、重々わかっているはずである。目的論から考えてみれば、喧嘩が原因で下宿を追い出されたのではなく、潜在的には、下宿を出るきっかけが欲しくて、宿主と喧嘩をしたと考えることができるだろう。

思惑通り、騒動は引越しにつながり、人生をリセットする機会を得ることができた。しかし、新しい環境である今の下宿に移っても、ジョウゼフの心に安定がもたらされることはなかった。いや、むしろ彼の不機嫌は悪化する一方だったのだ。

なぜジョウゼフは、こんなにいらいらしているのか。外出も極力避けるほど、他者が煩わしく、他者から解放されたいと願っているはずなのに、どうしてこんなに他者と関わってしまうのか。それはジョウゼフが、自分が本来すべきことを回避する言い訳を、他者に求めているからではないか。いらいらしている状態を創り出すことは、自分本来の課題から目をそらし、自分を憐れな被害者にしたてあげることを可能にする。

さらに、他者ともめ事を起こすからといって、ジョウゼフに、純粹な意味での他者に対する関心があるのではない。ジョウゼフの他者への関心は、自分が他者にどう思われているかということにフォーカスしたナルシスト的なものである。だから他者に少しでもバカにされ、軽んじられたと思うと、過剰に反応する。そして自分の存在を認めさせ、自分は君たち凡人とは違うのだ、ということを知らしめる目的で、不機嫌を常態化し、怒りという感情を創り出す。軽んじられるくらいなら、厄介な人と思われてでも、存在感を見せつけたいのだ。

ジョウゼフが屈折した形で求めているのは他者承認であるが、アドラーは、他者に依存する承認は、自立を妨げるとして、これに警鐘をならす。アドラーのいう自立とは、他者の評価に依存することなく、また環境のせいにするのでもなく、自分が主体となって、自分の課題に向き合う能力だ。問題が生じたときに、その問題を自分が創り出しているものとしてとらえなおし、自ら引き受けられない限り、真に人生の課題に向き合うことはできない。しかし、課題に直面することは、自分のアイデンティティを脅かしかねないリスクを伴う。だから人は、不機嫌や怒り、または何かの症状を創り出すことで、課題を回避し、現状を維持しようとする。しかしそれでは堂々巡りの出口は見えない。

宿主の娘婿に怒声を浴びせて下宿を飛び出したジョウゼフは、徴兵局に催促の手紙を送る。入隊して膨大な自由時間から解放されれば、問題は解決すると考えているジョウゼフは、またしても、入隊通知さえくれば、軍隊に入りさえすれば、という可能性の中に生きている。だが、可能性に生きている限り、今ある課題に向き合うことはできない。どれだけ内省を重ね、無意識に迫る自己分析や、哲学的思索を繰り返しても、自らの課題から逃れているうちは、自分を受け入れ、他者依存から自立することは難しいのだ。

#### 4. 結び

フロイトの精神分析は、それを經由せず、人の心について議論するのは難しいといえるほど、学問分野でも臨床分野でも、今も大きな影響力を持っている。しかし、クライアントの過去を

重要視するフロイトの精神分析における語り、「かわいそうな私」と「悪いあの人」に収斂しがちなのに比べ、アドラー心理学のカウンセリングでは、もう一つの質問「それでこれからあなたはどうしたいのですか？」が重要視される（岸見・古賀 2016）。これは、焦点を過去から現在に移し、可能性の中に生き、人生の課題から逃れている状態に終止符を打つことを迫る質問だ。

アドラー心理学は、過去を否定する。なぜなら、過去とは、置き換えができない固定した真実なのではなく、現在の私によって意味づけられた、書き換え可能な「事実に基づくフィクション」だと考えるからだ。私たちの記憶は、私に変遷していくにしたがって、その内容も解釈もしばしば書き換えられる。たくさんの出来事の中から、私たちが何をどのように記憶しているかは、私の過去を物語る以上に、現在の私を物語っているのだ。

アドラーは、心の症状は、目的に基づいて本人が選んでいることであり、最終的にその症状を取り除くかどうかは、本人の意思にゆだねられると考える。確かにこれは厳しい態度に見える。しかし、アドラーは、目的論によって、すべては自己責任であるというクライアントを責めているのではない。アドラーが言いたいのは、過去のトラウマや外部に原因を求めることなく、今現在の自分を起点に、自分自身の問題として課題に向き合うことの大切さだ。

目的論は、自分を悩ませている症状が、誰に対するどんな目的で、また何から逃れようとして、自らが創り出しているのかと問うことで、責任の所在を自分に引き戻し、そこから未来を見据えることを要求する。ジョウゼフに欠けていたのは、まさにそのような視点だろう。彼の内省は終始、他者とのこれまでの関係や、すでに起こった出来事を振り返って総括するものであり、過去に依拠している。未来を見据える目的論的からいえば、彼は全く自分の課題に向き合っていなかったということになる。論考では、ジョウゼフのテキストを、目的論の立場から批判的に考察することで、思考の袋小路からの転換を模索した。

目的論的に自分の課題に向き合うとは、現状は変えられないのではなく、自分が変えていないのだ、という場所から思考を出発させ、長年に渡って自分を支えてきた、自分に特有の考え方のくせや自己本位な解釈を直視することである<sup>9)</sup>。また、外部にある原因から症状を考えるという、これまでの慣れ親しんだ方法と決別し、自らに「これまでの不満はよく分かった。では、これからどうしたいのか」とコミットメントを迫ることだ。それは、怖くもあり、苦痛を伴うだろう。しかし、思考の袋小路に風穴を開けるためには、「過去に依拠した自分語り」を一旦保留にした場所から、「これからの自分」に対峙しなくてはならないのだろう。

## 注

1) ベロー文学の普遍性を議論した日本の研究としては、岩元巖「ソール・ベロー」（『アメリカ文学思潮

- 史—社会と文学—増補版』福田陸太郎・岩元巖・徳永暢三編著、沖積舎、1999年、421-24)、また現代の日本の若者との均質性から作品を読み解こうとした試みに、橋本賢二「新時代の英米文学研究試論—フリーターとニートに送るベロー文学からのメッセージ」(『大阪教育大学 英文学会誌』52号、2007年、23-35)、日本のサラリーマン都市に舞台を置きかえて『この日をつかめ』を読もうとした試みに、岩本巖『この日をつかめ』(NHK カルチャーラジオ 文学の世界) などがある。
- 2) フロイトの精神分析は、訓練を受けた精神分析医との、長期にわたる定期的なカウンセリングを条件にするものであり、自分自身の内省によってできるものではない。しかし、ジョウゼフの思索が、フロイトの精神分析の手法の影響を強く受けていることも事実である。そこで「精神分析的思索」と表現した。
  - 3) 斎藤(2009)は、昨今の心理学ブームの中で、精神医学、精神分析や心理学といった言葉が、厳密な定義もなく、あいまいに使われている点を指摘。互いにオーバーラップする部分もあり、厳密な区別は難しいものの、精神医学は「精神障害を診断し、治療する」ための学問、一方心理学は、主として「正常な心のありようを知る学問」というように定義している。また精神分析は、あらゆる人間の心をあらかじめ異常性を秘めたものとして取り扱う立場からの「心の分析のための技法」であるとしている。
  - 4) エドワード・ホフマン(2005)は、「1930年代半ばから後半にかけて、合衆国では、ヨーロッパにおけるヒトラーの恐怖から逃れてきたアルフレッド・アドラー、エーリック・フロム、カレン・ホーナ、クルト・ゴールドシュタイン、マックス・ウェルトハイマーといった亡命知識人の影響によって、人間主義心理学的な考え方のつぼみが顔を出しはじめた。……かれらは、最初は好意的な知識人やジャーナリストの間で、そして次第にもっと多くの人々の間で受け入れられるようになり、人間主義心理学的な考え方をアメリカの社会科学の土壌に注入することになった」(39-40)と指摘している。文学作品をはじめとする芸術の分野でも精神分析の手法を使った分析が広く行われるようになり、応用精神分析として認識される分野になった。
  - 5) ベローは、精神分析的手法を用いながらも、精神分析には批判的であり、その態度はアンビバレントである。Brans(1994)とのインタビューを参照(142-43)。この論考では射程外とするが、例えばベローの作品『この日をつかめ』では「自称精神分析家」のタムキンの口を借りてベローの精神分析に対するアンビバレントな立ち位置が吐露されている。
  - 6) 岸見(2017)は、目的論自体は、アドラーの独創ではなく、アドラーがいう「目的」はプラトンのいう「真の意味での原因」、アリストテレスのいう「目的因」に相当し、ギリシア哲学の流れに位置づけられるとしている。また「人は誰も悪を欲しない」というソクラテスのパラドクス(人の言動のすべては、道徳的な善悪とは別の次元で、その人にとっての善である)も、目的から人間の言動をとらえる言葉と理解できるとしている。
  - 7) フロイトの原因論やスキナーの行動主義、マクドゥーガルの本能心理学では、症状や行動は、過去のトラウマ、条件づけや遺伝といった外的要因で決められるとする決定論であるが、決定論を否定するアドラーは、外的要因の影響は認めつつも、最終的な決定は、個人の意思であると考えている。

8) 『Destiny』 作詞・作曲 松任谷由実

9) アドラーがライフスタイルと呼ぶ概念である。アドラーは変化をもたらすには、このライフスタイルの誤りを自覚することが最も重要であると考ええる。

### 参考文献

- アドラー・アルフレッド『人生の意味の心理学 上』岸見一郎訳、アルテ、2010年。  
——『人生の意味の心理学 下』岸見一郎訳、アルテ、2010年。  
——『個人心理学講義』岸見一郎訳、アルテ、2012年。  
エドワード・ホフマン「アブラハムマスローと、アメリカにおける人間主義心理学の隆盛」『アメリカン・スタディーズ入門—自己実現でみるアメリカ—』萌書房、2005年、39-56。  
岸見一郎『アドラー心理学入門』KK ベストセラーズ、1999年。  
——『幸福の哲学 アドラー×古代ギリシアの知恵』講談社現代新書、2017年。  
——『幸福の哲学 アドラーとギリシア哲学』角川ソフィア文庫、2017年。  
岸見一郎・古賀史健『嫌われる勇気』ダイヤモンド社、2013年。  
斎藤環『心理学化する社会』河出書房新社、2009年。  
フロイト・ジークムント『精神分析入門Ⅱ』懸田克躬訳、中央公論新社、2009年。  
ペロー・ソウル『宙ぶらりんの男』井上雄四郎訳、太陽社、1988年。  
Bellow, Saul. *Dangling Man*. 1944. Harmondsworth: Penguin, 1979.  
Brans, Jo. "Common Needs, Common Preoccupations: An Interview with Saul Bellow." *Conversation with Saul Bellow*. Eds. by Gloria L. Cronin and Ben Siegel. Jacson: UP of Mississippi, 1994, 140-60.

(ばく・いくみ 外国語学部准教授)

